

共同研究 ● 贈与論再考—「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究（2012-2014）

はじめに

生物学的にはすべての動物は利己主義的な存在であり、原則として他の個体に食物を与えるような利他的な行動をとらないとされている。人間は動物のひとつであるが、人はなぜ他の人に食物やモノを与えるのだろうか。また、それはどのような状況で行なわれ、いかなる構造と機能・効果、そして意味をもっているのだろうか。

上記の問題意識をもつ文化人類学者は、世界のさまざまな社会における贈与や分配に関する個別研究や比較研究を行ってきた。その嚆矢は、B・マリノフスキーのクラ研究やM・モースの贈与研究、狩猟採集民の分配に関する研究などである。

クラ研究と贈与論

西太平洋のトロブリアンド諸島において調査を行なったB・マリノフスキーは、腕輪と首飾りがそれぞれ島々の間を逆の方向に回っていく儀礼的なクラ交換とそれに付随する交易的交換について詳細な民族誌を残した。このクラ交換には、日常的に深い関係をもたない諸社会の間に連帯性を生み出す社会的機能があると考えられている。

M・モースはクラ交換の事例や北アメリカ北西海岸地域のポトラッチ儀礼の事例などを基に、「人は他の人にモノを贈るが、それが贈り手に戻ってくるのはなぜか」という問いにつ

いて検討している。モースは「贈与」は、提供の義務、受け取る義務、返礼の義務という3要素を含んでいる点を強調し、外見上は一方的なモノの流れに見えるが、返礼という行為によって「互酬性」という特性が備わっていることを指摘している。モースは、贈与の提供・返礼のプロセスを「義務的循環」と呼んでいるが、第3者を介した「返礼」の場合、間接性と遅延性が「贈与交換」（互酬性）のシステムを形成していると主張する。また、モースは、贈与交換は単なる経済的な交換ではなく、宗教的、道徳的、政治的、法的、審美的でもある「全体的社会現象」であると主張している。モースは、モノの互酬的な流れは、「ハウ」（物の霊）のような現地の人びとの意識の産物である情動的・神秘的な霊力によって生み出されると結論づけている。

モース後の展開

モースの贈与論は、C・レヴィ＝ストロースやM・ゴドリエ、M・サーリンズらによって批判的に受容され、さらに展開されていった。

互酬的もしくは循環的なモノの交換の原動力を霊力に求めるモースを批判したレヴィ＝ストロースは、それを互酬的交換によって連帯を維持する無意識的・客観的構造に説明を求めた。彼は、イトコ婚を事例として、ある種のシンボルとして女性があるリネージュから別のリ



シロイルカの脂皮を村人に手渡すポートキャプテン（1999年10月、カナダケベック州アクリヴィック村にて）。

ネーじへと交換されていく交叉イトコ婚による女性の一般交換と平行イトコ婚による女性の限定交換を抽出し、循環的な交換となる前者がより安定した社会的連帯を生み出すことを指摘した。レヴィ=ストロースが扱うのは集団間の構造であるので、個人間の意識が考慮されることはない。

M・ゴドリエは、贈与できない「聖なるモノ」に着目し、交換不可能なモノの存在こそが交換を可能にし、人間関係を取り結ぶ契機になると主張した。彼は、贈与とは「与えながら保持する」行為であると主張したアネット・ワイナーの考え方にに基づき、「与えるために保持し、かつ保持するために与える」という贈与に関する難解な仮説を提起している。

M・サーリンズは、互酬性を連続体と考え、一方の極に惜しみなく一方的に与える「純粋な贈与」を置き、「一般化された互酬性」と呼んだ。その対極に相手から利益を得ようとする「否定的な互酬性」を置き、両極の中間点に等価交換のような「均衡のとれた互酬性」を位置づけた。サーリンズは、社会的な距離（社会的親密度）と互酬性が比例することを指摘した。さらにサーリンズは、惜しみなく与える贈与には社会的なランクの差や権力差を生み出すメカニズムがあることや基本的な食物は富とは切り離されて、独自の交換経路を生み出している点などを指摘している。

サーリンズやA・W・グールドナー、今村仁司らは、贈与が生み出す貰い手側の「負い目」や「負債」に着目する。負い目が返済の原動力となりうることやそれが権力差を生み出すメカニズムの解明は「贈与」研究の争点のひとつである。また、P・ブルデューは、返礼の時間差（遅延性）を問題にし、贈与から返礼までの間に生じる時間的な間隔は、両者の間に遮蔽物の役割を果たしており、両者はそれぞれ関係のない単独の行為（実践）として研究するべきだと主張している。

狩猟採集民の分配

カナダ極北地域に住むイヌイットら狩猟採集民の社会的特徴のひとつは、食物分配の実践である。彼らは、食物、とくに狩猟漁労活動の産物である獲物を一人占めすることなく、さまざまな機会に分配する。この分配には多様な形態が認められる。ある人が他の人に獲物のすべてもしくは一部をあげる分与や分ち合い、獲物を獲った人が別の人にあげ、それをさらに複数の人に分け与える再分配、獲物（の一部）をお互いに贈与し合う交換などがある。多くの狩猟採集民社会では、獲物や食物の分配はかならずしも交換の形態をとらないが、ある人から別の人へと一方向的に獲物や食物を与える点に特徴がある。

多くの文化人類学者は人類進化の過程で分配が環境適応の上で機能を果たしてきたと考えているが、分配をモースの「贈与」の視点から解明しようとした研究はきわめて少ない。むしろ外見上は（与えた食物が別の機会に与え手に戻ってくる）贈与のように見える狩猟採集民の分配は、ほとんどの場合、食物の一方向的な移動であるため、贈与ではないとみならず見解が大勢を占めている。狩猟採集民の「分配」研究は、モースから現在にいたる贈与論の展開とは異なる展開を遂げてきたが、贈与と分配はどの点が同じで、どの点で異なるのかという問いも研究課題のひとつである。

贈与に満ちている現代社会

現代社会を見わたすと、誕生日のプレゼントやクリスマス

ス・プレゼントから臓器提供やボランティアによる地震や津波の被災者の救援活動、歳末助け合い運動、発展途上国への開発援助まで、さまざまな形態や規模、内容の贈与行為が存在している。これらの贈与は無償の利他的行為や「他者のため」と外部から解釈される行為を含んでいる。日本におけるボランティアの語りについて分析を行ってきた仁平典宏は、無償の善意に満ちた贈与行為が、障害者を障害者の役割にとどめ、その可能性を縮減させるという反贈与的な結果を生み出すことがあることを指摘し、「贈与のパラドックス」と呼んでいる。

これらの広義の「贈与」行為もモース以降に展開してきた「贈与論」によって理解や説明が可能なのであるか？臓器提供や救援ボランティア活動、開発援助を「贈与論」の枠組みで捉えなおすといかなることになるのだろうか？

共同研究の目指すもの

人類社会には狩猟採集民の「分配」から現代社会のボランティア活動までさまざまな利他的な行為（贈与行為）が存在している。本共同研究の目的は、世界各地におけるさまざまな形態の贈与や交換、分配の民族誌事例を学際的に比較検討することによって、贈与や交換、分配などの概念と既存の説明モデルの有効性を検証することである。また、グローバル化が進む市場経済の浸透によって、各社会の贈与・交換・分配の実践がどのように変化してきたかについても検討を加えたい。

このため、本共同研究では、北アメリカのグイッチン社会や北西海岸先住民社会、イヌイット社会、ユーラシアの日本社会やモンゴル社会、カザフ社会、フランス社会、オセアニアのパプアニューギニア島嶼部社会やフィジー社会、トンガ社会、アフリカのサン社会や農牧畜民社会、都市商人などにおける儀礼的交換や贈答、分配を含むさまざまなモノや食物などのやり取り、そして現代社会に見られるボランティア活動や開発援助のような広義の贈与行為に関して具体的な事例を比較検討するとともに、それらの事例を文化人類学や霊長類学、行動経済学、経済心理学、社会学などの視点から学際的に検討する。さらにその比較検討を通してこれまでの中心的な人類学概念やモデルを検証することにより、それらの有効性と限界を把握し、理論的な展開につなげることを目指す。

贈与や交換、分配に関する通文化的かつ学際的研究は、個別の行為の背後にある特定のタイプの社会や人類に共通する側面を解明する手掛かりとなり、新たな人間観や社会観を提起できるのではないかとひそかに考えている。

【主要参考文献】

- 伊藤幹治 1995『贈与交換の人類学』筑摩書房。
- 今村仁司 2000『交易する人間（ホモ・コムニカンス）』講談社。
- 岸上伸啓 2007『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』世界思想社。
- 仁平典宏 2011『「ボランティア」の誕生と終焉——贈与のパラドックス——の知識社会学』名古屋大学出版会。
- モース、マルセル 2008『贈与論』（新装版）有地亨訳 勁草書房。

きしがみのぶひろ

研究戦略センター・教授。専門は文化人類学、北方先住民文化研究。おもな著書に『捕鯨の文化人類学』（編著 成山堂書店 2012年）や『北極海の狩人たち——クジラとイヌピアットの人々——』（風土デザイン研究所 2012年）、『開発と先住民』（編著 明石書店 2009年）などがある。